

聖書:サムエル記第一16章1～13節

説教:主は心を見る

はじめに

今日の午後から2026年度信徒総会を開き、これまでの一年のことを感謝し、これからの計画について話し合っけてまいります。そこで新しい年度の道標聖句としてサムエル記第一16章7節のみことばを掲げたいと思っています。2024年から後任牧師の招聘を進めてきたのですが、残念ながらこれまでふさわしい方は与えられず、2026年度も引き続き祈り続けていくことになります。そこで、取り上げたまことばがこの箇所です。ここから主が語ろうとしていることに耳を傾けてまいります。

1 背景

1) 初代の王サウル：主のことばに従わなかった

1節を読みます。「主はサムエルに言われた。『いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。』」

イスラエルは王を立てず、祭司サムエルが国をさばくという体制をとっていました。ところがサムエルが高齢になったことから、人々は不安に思って王を立てて欲しいと願う。そこからいろいろ紆余曲折を経て、イスラエルの初代の王に選ばれたのがサウルです。彼は最初、非常に謙遜にふるまっていたのに、じょじょにおごり高ぶるようになり、とうとう主の命令に従わず、自分勝手なことをしてしまします。

2) エッサイの所に向かうサムエル

そのため、主はサウルを退ける決断をする。では次にだれが王となるのか。勝手に選ぶわけにはいかない。主が決めてくださらなければなりません。あるとき主はサムエルに対して、ベツレヘムに住むエッサイの家に主が選んだ者がいるので、そこへ向かうようにと指示を出す。

ところがサムエルはこう言うのです。2節。「どうして私が行けるでしょうか。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」考えてみれば、サムエルがやろうとしていることは、サウルに対して王の座から退けと言うのと同じです。それでサウルは怒って自分を殺しに来るだろうということです。

いっけん自分のいのちを心配しているようにも見えますがそうではありません。サムエルは、たとえいのちの危険があつても主のことばに従う覚悟ができています。ではなぜこういうことを言うのか。もし自分が殺されれば、次の王となるべき人に油を注ぐ者がいなくなる。もしそうなれば主のみことばが実現せず、曲げられてしまう。そんなことがあつてはならない。サムエルはあくまでも主のみことばにこだわっているのです。

2 王ダビデ

1) サムエルの直感

そこで主は、2節後半から3節にあるような備えをさせて、無事にベツレヘムに向かう。そしておそらくここはエッサイの家だと思いますが、その家に入り、エッサイの息子たちと面会をする。その場面が6節です。「サムエルはエリアブを見て、『きっと、主の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ』と思った。』」エッサイの長男であるエリアブは、背が一番高いかにも頼もしく見えたのでしょうか。エリアブに違いない。サムエルはこう直感した。

2) 主は心を見る

ところが主はこう語るのです。7節。「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

サムエルは、長くイスラエルの霊的な指導者として活躍した人です。それほどの人なのに、サムエルは間違っったというのです。どうしてか、詳しいことはわかりません。古い演歌に「ぼろは着てても、心は錦」という歌詞がありましたが、ここでも中身が大切だと言っています。このことから二つのことを教えられます。一つ目。心を見るということがいかに難しいかというのも事実です。あの経験豊かなサムエルでさえ間違っった。私たちも間違っう可能性がある。でも諦める必要はない。そこで二つ目に教えられること。大丈夫、私たちが間違っても主が正しく導いてくださるということ。そこに信頼することができます。

3) 「さあ、彼に油を注げ」

サムエル記に戻ります。こうして七人の息子たちが連れて来られました。ところが七人全員、「この者を主は選んでおられない」と言われてしまう。その中にいると思っただれも該当者がいない。予想外の結果になります。私たちも似たような経験をしてとまどうことがあります。大切なのは、そのときどうするかです。主のみことばは間違っていたと言って諦めるのか、それともあくまでも主のみことばにこだわり続けていくのか。そういうときこそ、私たちの信仰が問われます。

サムエルはどうしたか。主のことばは必ずなると信じて、こう尋ねる。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッサイの返事はこうでした。11節後半。「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」

ここで初めてサムエルは、一人欠けていたという事実を知らされる。どうして初めからダビデを連れて来なかったのか。おそらくこういうことだったのででしょう。私のがどものとき、家に村の人たちを招いて大きな宴会を開いたことがありました。兄たちは宴会の席に座るのですが、末っ子だった私はあっちに行っていると言われました。公式の場では小さな子どもは邪魔者扱いされる。イスラエルをさばいてきたサムエルは、町の人たちが震えながらやってくるほどの特別な存在なのです。失礼のないように身なりを整え、礼儀を尽くさなければなりません。まだ少年だったダビデも、お前は祝宴に来なくていいから羊の番をしていると言われたのでしょう。

そんなダビデが呼び出され、サムエルの前に立ったとき、どんな格好をしていたか。きたない野良着を着て、足はどろだらけ、手は汚れ、羊の匂いをぷんぷんさせていたでしょう。そんなダビデを前にして、主はサムエルにこう言われます。12節後半。「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」

3 なにを見ていくのか

1) 姿ではない？

このようにしてイスラエルの次の王が選ばれていきました。それはよいとしても、12節前半にあることばはどういうことでしょうか。「エッサイは人を遣わして、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だった。」サムエルは、エリアブの外見で判断して失敗し、主は心を見ると言われた。そんなふうに釘を刺されていたのに、ここでは、ダビデは血色がよく、目が美しく、姿も立派だった、と外見のことが書いてあ

る。これは矛盾しているのではないか。そんな疑問がわく。

聖書は大切なことを教えるときに、わざとひっかかるような書きかたをすることがしばしばあるように思います。

どういうことか。ここまで、エッサイと七人の息子たちは、ダビデを子ども扱いして、サムエルが来ても家にいる必要はない。子どもは羊の番をしていればよい。ダビデの姿が立派だったというよりも、いかに取るに足りないものであったのか。そういう話ししかなかった。まずそのことを確認しましょう。それなのに、「彼は血色が良く」とある。なんだか不自然です。

2) 罪あるダビデであっても

そこで思い出していただきたいのは、サウルが王の座から退けられた理由です。彼が主のことばを退けた、主のことばに従わなかったので王の座から退けられた。そうすると次の王には何が期待されるか。当然のことですが、主のことばに従うことが一番に期待されるはずです。主はダビデの心のなかをご覧になり、彼こそ主に従う者であると太鼓判を押して選んだということになる。

エペソ人への手紙にこうあります。「すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。」（エペソ5章13節）主の光が私たちの心にあるものを照らし出すので、心のうちにあるものが表に見えてくるということです。主がダビデの心に光をあててご覧になって見えたもの。それが、「彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だった」ということばです。人の目には薄汚い小さな子どもに見えても、主の目にはダビデがこのような姿に見えているのです。

3) 主に従う者として

ではダビデの心の中には、汚れた思いや罪はまったくなかったのか。そんなことはない。ダビデがどんなに大きな罪を犯していったのか、全部聖書に書かれている。つまりこういうことです。主に従うということは、「罪を犯さない」という意味ではありません。私たちのうちには良いものは一つもないので、残念ながら罪を犯してしまうことがある。大切なのはその次です。サウルは罪を誤魔化して主のみこころを損ないました。そうやって主のことばを退けた。

ですから主に従うこととは、犯した罪を正直に主の光の中に差し出して、告白していくこと。ダビデは何度も罪を犯しながら、その罪を光にさらし

ていく。そして、やがて来てくださる救い主を待ち望み、キリストの十字架によって罪が赦されることを信じて主に従っていく。その信仰によって、彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だと言われたのです。

4) 主が選んでくださることを期待する

主は、このような信仰者をイスラエルの王に選びました。この教会の次のリーダーも同じなはずです。

私たちは、サムエルのように目に見える所で判断してしまうかもしれません。しかし、主は心のうちにあるものを正しくとらえてくださり、どのような霊的な資質を持っているのかを判断してくださる。そして教えてくださる。主がふさわしい方を送ってくださると信じて祈り続けてまいります。